

## 2018年1月

<p>紅白の興味うすれて除夜の鐘 ひと呼吸すばめた体寒空に 春遠く山茶花咲く道佐鳴畔 金柑の熟れて友呼ぶ鶉の笛 山茶花も桜も葛の服纏ひ 久留米木の地名脳裏に遠い思慕 木も山も道路も屋根も雪被る 同軌道寿ぐ気分や初日の出 寒さむに夜景も眺めた田毎の月 年賀状老いを生きてる声聞こゆ 初花の梅一輪の笑いまぶし 異国語に追い越され行く初詣 仲間去り新しき年の始まりぬ 健康の褒美にもらう歳一つ トランプよ皆仲良く遊ぼうよ 日の丸は遠い昔の飾りかな</p>	<p>逆さ富士富士の裾野を賑わしく 白地なし又も買込む日記帳 立ち止まる犬が気遣う散歩道 目の前の繋ぐ手遠し嗚呼無念 床上げし久しぶりの薄化粧 角栄の平和思想に驚愕す 八十二来て筋力アップ大慌て 歎異抄飾るだけで読み切れず 再放送寺内貫太郎泣き笑い お年玉当たるは残りの年賀状 良薬は孫のひとこと苦くない 訃報増え年賀状の数減り続く 世を煽り稜稜ぶりの国防費 あの人に言わせてみたい真実を しゃしゃり出て踊らされても澄まし顔</p>
--	--

## 2018年3月

<p>囀りや障子に小鳥の影走る 春光に羅漢の顔の柔らかき ふらこを漕いでまた漕ぐ迷い道 小雀の電線に一行春を待ち 春分の冷雨桜の開花ゆっくり 木の芽見え早や虫食いの春キャベツ 草引けば細き根土にしがみつき 岨道に植えし水仙咲き誇り シャキシャキと独活特有な春の味 延命菊かわいい花色待ってるよ 春全開浴びる陽差しの雨上り 乙女らのハミング流る春の夕 桜咲きランドゴルフ卒業す 桜五分風雨に耐える強さあり 鮎の群れ小川のせせらぎ散歩道 野良猫も春待ち顔の日向ぼっこ</p>	<p>フィギュアのスコサロシヤの女子演技 久し振り故人が繋ぐ葬儀場 佐鳴湖にパンダ来るぞと大騒ぎ 湖に桜にくらいいほどお洒落だね 桜だね俺が主と咲いばり 深刻と首相が言えれば親方も 病院の食堂おしゃれにジャズ流る 貨幣館ドサクサの日々甦る 急な雨道路の水の行き場無し しゃしゃり出て騙され騙し大騒ぎ 採り過ぎてかんこ鳥鳴く潮干狩 暖かき雨冷たき雨に模様替え 芹知らぬ大人も数多居りにけり 老婆あり老いたる男好好爺 忘れん坊昔の事は事細か</p>
---	--

## 2018年4月

<p>身の丈を越して豌豆花溢れ 絵日傘を開くとも見ゆしだれ桃 よもぎ摘む春の匂いが手にのこり 佐鳴畔散る花顔に春惜しむ シクラメンピンクの色濃く夏を待つ 春嵐過ぎ鳥の水浴び階下したの庭 すみれ咲く車行き交う道の端に 楠若葉さやさや揺れてひなの声 黄八丈まとひて巢立つ十五歳 温まり踏まれた草にも花が咲く 落葉除け花の芽見つけ小躍りす 露天風呂満月輝き恥らわれ 春疾風アートとばかり花散らす 老いさらば芽吹きし声の騒がしく 初蝶や人出ピークのトラの檻 散り果てしコヒガンザクラにバスの列</p>	<p>久々の寒さ覚えて日向ぼこ どんぐりを宝とにぎり笑みの孫 新入生ランドセルだけ歩いてる 凧近し三味の音色がおどってる 中身より字の大きさに選ぶ本 黒板に写メする乙女次何す 近ごろは話も入歯と噛み合わず 阿呆らしや切り捨て御免膿は出す 内視鏡見れば化膿が己が身に 「武士道」の美学忘れて国づくり 化粧品減らぬ春なりマスク買う 世界一周とふと浮かびたるくじ売場 同じ刻とき同じ場所にてラブソング 稲造も鑑三もなく天心も 平成の三十路に咲けるスミレ草</p>
--	--

## 2018年5月

<p>新茶汲む淡き金色澄し一服 初夏の夕窓開け放し蚊やり焚く 雨に濡れ若葉の緑夏を呼ぶ 朝陽浴び花がら摘みし日課のごと 手相図を眺め納得祭り夜 パンの耳撒いて一茶の心内 春服を青葉と共に街歩き 鯉幟り裏の苦屋に納品す 朴葉寿司初夏には届く下呂の味 夕日落ち卯の花白く際立ちぬ 名犬に育てたはずが迷犬に パワハラだ蹴らせたんだよ大人がね 孫帰る妻と目くばせ安堵する 先を見て世界活発国止まる 家事をするロボット欲しき五十肩 平成で北の問題終わってよ</p>	<p>実豌豆稔り具合を手に感じ 五月晴れ狭庭一面若葉色 とりどりのアジサイの花梅雨予感 祭り過ぎ湖畔の新緑深み増す アクトから見下ろす海の近々し 夏兆す御所の池面の蒼透けて 青葉闇古刹へ誘う靴の跡 朽ち耐えて木彫佛陀や夏燕 石山の新緑に我ひとり居り 埋もれ木に呼び止めれて茶を啜る 本大も本官邸もひとつ穴 卯の花をカップに浮かべ花いちもんめ アラアラとマアママアとけふもまた お菓子はねおくわして書いてった オイオイ春は牡丹餅ってゆうんだ</p>
---	---

## 2018年6月

<p>あじさいの花房枝垂れ梅雨入りす もみじとさくら山羊の親子に青葉風 新緑背に優雅に白く胡蝶蘭 梅雨空に水玉描く合歡の花 枝払い光と風がふりそそぎ 一周忌思ひつぎつぎ花菖蒲 寺庭やあえかにめぐるる梅雨の蝶 石仏に年輪のごと苔の花 護摩の炎馬酔木の花も見え隠れ 紫陽花や鮮やかなりし雨あがり 気にかかる残した金の五十億 あの世からペットが語る真実を 孫が来るみやげは笑みとさわがしさ 陽当りやどこから見ても黒い影</p>	<p>あやとりを習いて出来て二度出来ぬ 駿河湾フェリーにわかの人波 真夜中のサッカー戦に大拍手 五七五石の上にも早や三年 抗ガン剤腹より髪を大事がり 早送りしたい彼女の愚痴小言 ロコモ症健康寿命年相応 うたをよむ喜び知りて卒寿過ぎ ひと休み又一休み暮れ行く日 腰を病む夫刻りかけの像さびし 収穫の目途の立たないズッキーニ 本日もチランとばかりのポストかな 太っちょも汗を流せば脱水症</p>
--	---

## 2018年7月

<p>梅雨寒も夏越の被いで無病です 風鈴がだまりこくっている暑さ 庭先に紫蘇の葉食べよと生い茂り 暑気払い短髪にして気分よし 水撒けど花々の株減り続け 世界中熱波の猛威先見えず 病棟の森の向うは母の里 空高くいづこの祭か遠花火 被災地の蝉も今頃鳴いてるか 梅花藻のゆらゆら涼し地蔵川 木洩れ陽と杉の木立のハーモニー クーラーのつけ通しにも慣れてきた 夏場所の新ヒーローに湧きにけり 道明寺そっと出てきて涼を呼ぶ 琵琶湖より湧き出る霧や半夏生 夏の霧いよよ濃くなり道消えて 夏霧やすむらさきの比叡山</p>	<p>国はダム県は河川で民地獄 真夜中の警報聞けず被害甚 電気ガス水道もなく明日もなし 奈翁なみ四時間で醒め読書かな 場を察知呆けふりしてなごませる 骨密度朝の一錠効き目信じて 飽食日々昔の粗食心痛む 今年も来ぬ子供の顔を忘れそう 緊急時あの人たちは能転気 賭博法悪代官へ袖の下 傷癒えず落ち込む朝や蝉しぐれ 心脆くなりて極暑の花に似る 怪我憂ふ見舞電話に涼貰い 伸びしまま草の緑に涼もらひ 佐鳴湖や昔と違ふ蝉の声 夏草や麦藁帽子の子らの声 虫の音を五月蠅いと言う首都の人</p>
--	--

## 2018年8月

果てもなく病歴語る卒寿の友  
空青く全窓開けて喚起の朝  
バイキング一番に取る西瓜かな  
蓮の花ここが浄土と指し示す  
朝開き夕べに蕾む蓮の花  
蓮根も匂がなくなり季語ならず  
風鈴に涼しさもらい眠る老い  
低気圧腰の痛みを予報する  
輝星に釘づけされし暑い暑  
戸を開けて熱風被り立ち竦む  
台風の経路迷走驚かず  
高温に常緑守り命続く  
こぼれるほど松葉ボタンや夏盛り  
えさ拾うすずめ暑かろ三十五度  
あの酷暑どこへ行ったの今朝の涼

四総理楽しめましたか芝の上  
中元を返しそびれて秋に入る  
雨の日の味方はドラム洗濯機  
三歳でスマホに指をすべらせて  
熱いなあ言った分だけ汗が出る  
ようやくに涼しさもどり茶を入れる  
「こないだ」と五十年前の話する  
目を覚ましオキタタンに句を忘れ  
たとえとし美しい女性フヨウの花  
吾が人魚陸に上りて受験生  
待ちかねしこの朝この風桔梗咲く  
漢字出ず嗚呼情けなや情けない  
ハゼ釣りやトンボの留まる竿の先  
爽やかに歩く姿に秋の風

## 2018年9月

孫と行く青春キップの夏休み  
やまあい  
山峡の無人駅舎や夏あかね  
花畑四季彩の丘美瑛町  
畝傍山キバナコスモス秋深し  
汗引きぬ涼風青葉を通りぬけ  
稲の出来気になる私田舎の出  
夏物の片づけとまどう秋暑かな  
やっと秋白き積み団子仏前に  
蟋蟀の鳴き初めし秋の宵  
秋晴れに八十路の会話若き日々  
ポーチュラカ晩夏に芽吹き庭飾る  
掃き清め風のいたずらまた落葉  
病窓の空晴れ渡り敬老日  
流れ行く雲に委ねる思秋かな  
つかの間の澄みし名月伏し拜む

時流れ今やひっそり小和田駅  
大相撲息止めて観てあの世かな  
口よりも大きなポテチを喰べる孫  
全集を読みもしないで棚のじやま  
籐椅子の仮眠いつしか夕暮に  
マッサージ肉と骨とを分ける技  
頭脳戦舌戦俳句甲子園  
半世紀老婆や演りきり希林逝く  
寿命伸び人生何かとややこしい  
お達者で百まで生きる顔と顔  
「惨敗よ」虎の威を借り大威張り  
我が国土災害乗り越え光さす  
飯田線今や電車もワンマンカー  
旅ゆけばトンネル数えて123  
十五夜にうさぎの如く跳ねる子ら

## 2018年10月

<p>颱風禍街はセピア色の中 浜松城仰ぎ居る松色変へず 木の実独楽作りしときの遥かなり 充分に生き悲喜の想い秋深し 異常気象桜の花もまどわされ 秋の旅テレビで楽しみ老いし足 秋空に思い切り打つ心地よさ 潮風に打たれた木の葉ゴミの山 気温差に着る物選ぶ難しさ 新米にありつけるこのありがたさ 無花果やそっと甘露を配りけり 秋苗道行く人の背にとまり 塩害に水まく人秋の枝 秋日和豚汁うまき祭の日</p>	<p>虫の音のひときわ澄し静夜かな 柿の実の色付き楽し日々眺め 土瓶蒸し松茸うすく鎮座して 松茸は値札だけみて通りすぎ 霜降りを食べる夢見てよだれ拭く 忖度で部下がやったと皇太子 差し歯抜けハロウィン向けの顔となり 安田さんの帰国奇跡か取引か 停電であかりのおかげ身にしみる 停電は幼き日々を懐古する 目にやさし心にも優し和ろうそく 安らぎを花に求める老いの日々 医者通い足運ぶごと薬増し 落穂拾いもう終わったのね雀来る</p>
---	--

## 2018年11月

<p>臨幸の楽器の街に小春風 挨拶の瞳の美しきマスクの子 ボーナスは無くて老後を歩みけり 秋の風部活帰りにコロッケだ 台風で電線垂れてしどけない 手探りでローソク求め仏壇に 今年こそ今年こそはと書く賀状 柿採りて筒抜けとなり空青し 落葉掃き堆肥作り気も新た 新蕎麦の香今年も待つ初秋 焼芋の手に暖かさ秋の午後 鬼灯や網目に灯りひとつあり 小遣いに拾い椎の実の記憶 秋夕焼富士のすそ野に雲を置き</p>	<p>書道展終わり片づけ年の暮 葉が落ちて淋しき道に横断幕 虫の音に誘われ仰ぐ十三夜 夕陽浴び落葉掃きよせ楠香る 箕輪湖や行く秋惜し老夫婦 みずうみのしじまをやぶる鴨の声 いつの間に私の役目ゴミ出しは 絵が苦手虎を描けども猫となり 孫の絵に末はピカノかママの夢 健康寿命維持難し願いのみ 晴れやかな孫の結婚隅の席 眉をひく鏡ますます近くなり 数を背に猪突の如く突走る 憲法に三百万余の犠牲あり</p>
--	--

## 2018年12月

<p>秋深し親しき友と振るクラブ 夕暮れの風の淋しや返り花 雲間より差し込む日差し毛糸編む</p>	<p>電子辞書老いを助けて後を押す 讚美歌を父が歌うと演歌調 デザートより酒の方見て又一杯</p>
---	---

コンサート第九聴かせて街師走  
急降下一気に真冬暖炉焚く  
行く年の災い去りて福よ来い  
寒暖差日々惑わさる年の暮れ  
侘助の今を盛りと年の暮れ  
年の瀬ひとがたしろや人形代に移しけり  
冬空にさっと流れる光あり  
厳冬や常緑樹こころ癒やせり  
独り身の師走をよそに日向ぼこ  
孫からの珍味嬉しく舌鼓

おしぼりを素早く受けて顔を拭く  
神棚に昇進報告むしん無神論この息子  
古漬けの大根食む音齒が達者  
年の瀬や募金を入れてそっと去る  
増え続くインバウンドにうかれけり  
老犬や諭吉出てゆく医者通い  
年越しの寝しなの蕎麦の胃のもたれ  
許し合い親交続く卒寿過ぎ  
ひまわり咲き雪降る様や狂詩曲  
あのパプリカ陽の目見られずお蔵入り